



祐介の目

大田ゆうすけ
(福山市議会議員)

No.52

毎月1日号に掲載

理場のすぐ隣の日本化薬まで工業用水の配管は来ているなど、地の利もある。現に福山市の姉妹都市である韓国の浦項市では、日量10万トンの下水処理水を工業用水に再生するプラントを昨年より稼働させ、ポスコ製

上下水道局の将来展望

福山市上下水道局の事業運営は人口減少による使用量減少、管路の老朽化による維持管理費増加の反面、職員は減らされ、予算も削られるなど、事業自体が先細りとなるだろう。

このような暗い先行きを打開するには、海外進出という案がある。具体的には、JICAと組んでODAを財源に上下水道インフラを整備国に技術提供する。これに取り組んでいる自治体が東京都や大阪府であり、福山市も姉妹都市であるフイリピンのタクロバン市などに打って出てはいかだろうか。

もう一案として、新技術に挑戦して新たな水源を確保するという考えがある。箕沖にある下水処理場(芦田川浄化センター)から海に放流される下水処理水は日量10万トン、これを再生して工業用水に転用すれば、河口堰の役目は終わるのではないか。下水処理水は洒れる事のない安定水源であり、下水処

鉄所に供給している。

さらに河口堰の水源としての機能が不要になれば、国内で2番目に大きな干満差(1位は有明海)を利用して潮力発電所に転用すれば良いだろう。やはり4年前に完成した韓国の始華(シファ)潮力発電所が参考になる。この発電所の建設の経緯が面白く、当初は遠浅の海を堤防で閉め切り、干拓して工業団地を造成し、内側の湖を淡水化して工業用水に利用しようとした。しかし閉め切ったことにより湖内の水質が急激に悪化して水利用を断念した。この現象は芦田川河口堰と同一だ。

その結果、閉め切り堤防の桶門に発電タービンを取り付け、潮力発電所に転用したところ、年間発電量55万kWという巨大発電所が誕生したわけだ。福山市上下水道局もぜひこのような取り組みを参考に、未来志向の事業展開を行ってほしい。職員のやる気も出るし、世界が注目する上下水道局に生まれ変わるに違いない。